

●柳田国男が狩猟研究

国内ではここだけという「民俗芸能博物館」が設置されている椎葉村は、山村の原風景を色濃くとどめる秘境である。ここには伝統の焼き畑や狩猟と結び付いた、習俗やまつり、それに神楽や民謡などの民俗芸能が豊かに伝承されている。

柳田国男（一八七五—一九六二年）による日本民俗学が、この村のイノシシ狩りの研究から始まったことは、一般にあまり知られていない。むしろそれを受けた「遠野物語」の方が有名である。

椎葉のイノシシ狩りの作法を書き留めた「後狩詞記（のちのかりことばのき）」は、「遠野物語」が世に出る前年の一九〇九（明治四十二年）に出版され、初版は知人や世話になった人に贈る、わずか五十部ほどだった。

著者の柳田国男は東京大学で農政学を学び、

農商務省で官僚生活をスタートさせる。そして彼は現状では日本の農業が豊かになりにくいことを憂い、農村問題と取り組んでいくことを心に決める。

出版の前年、彼は講演のため長期間九州を旅するが、その中で「椎葉という土地では、今も焼き畑が営まれている」という言葉を耳にし、予定を変更して現地へ向かう。

中央の官僚がやって来る。これは当時の椎葉にとつて、大変な出来事だった。そのため村長の中瀬淳（すなお）が先に立ち、柳田の送迎から関係資料の送付まで、すべての世話を引き受ける。そして一週間にわたり、村内のほとんどの地区に足を向ける。彼はここで初めて接した民俗世界、とりわけ山の生活慣行には、学ぶべきことが多かったと、後々まで語っている。それが狩猟に伴う獲物の共同分配の作法である。

分け隔てなく村人に分け与えられる肉を見て、「富の均分といふが如き、社会主義の理想が実行された」と説き、これは一つのユートピアであると、言及している。柳田による日本民俗学は、このときの記録をまとめた「後狩詞記」から始まったとされている。これには彼の依頼を受けて、猟師たちからこれらのことを聞き書きした中瀬淳の献身的な協力がある。その功績をたたえ、現在中瀬の生家に「日本民俗学発祥の地」と刻んだ石碑が建てられている。

博物館では民俗資料の展示のほか、神楽なども上演されている。また五ヶ瀬町と結ぶ「国見トンネル」の完成によって、アクセスがよくなり、県内外からの来村者が増加している。

永松 敦



椎葉民俗芸能博物館。日本民俗学発祥の経緯を伝える